編集室から

昨年殆ど代筆だった本欄でしたが、新年を契機に思い切って「後書き」的な欄にしたいと思います。

新年号のご寄稿には、小生が駆け出しの頃から一貫して公私共にご指導を頂いてきた金井先生より頂戴いたしました。知己を頂いた頃から「いつ寝られるのだろう」と思うほどの超人的な仕事をされる方でしたが、いまでもそのままに仕事と大学教授の両職に邁進されています。さらに先生は、弊社も所属する地方シンクタンク協議会の代表も務められており、同会行事の改革を進められている方です。有難うございました。

さて、表紙写真は昨年５月に参詣した出雲大社の大注連縄です。お訪ねした日は、丁度本殿を新築するため、ご神体を移した後の本殿を一般公開している日でした。そのような歴史的な日に訪れられたこと自体も凄いご縁なのですが、僕はといえば、出雲さんに詣でたいと言う思いを優先させ、厳かに禊祓いを頂きました。

清清しい思いで拝殿を後にして境内を眺めると、本殿への行列は人で溢れ、既になんと４時間待ち。二度と拝めないかもしれない機会でしたが、本殿の見学は諦め、帰途に着きました。

後日振り返ってみると、出雲大社には５年前にも参詣しています。さて、５年後の平成25年、どんな思いで出雲に出かけていることでしょうか。

このニュースレターを創めたのが2001年１月。今年で足掛け９年目となり、本号は通巻97号で、この４月には100号を迎えます。思えば長いようで瞬く間のようでもあります。

皆様とのご縁をつなぐ媒体として、アスリックニュースを引き続き宜しくお願いいたします。（は）

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。
その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2009/01
(株)アスリック
http://www.neting.or.jp/usric

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話　076-233-7217
Fax　076-233-7375
Email　usric@neting.or.jp

2009/01
(株)アスリック
http://www.neting.or.jp/usric

謹賀新年

睦　　月

出雲大社にて
by hama

寄稿『大学教授とコンサルタントの両立?』

立命館大学経済学部教授　金井萬造

浜君との出会いは二十五年前にプロの分野である地方再生の本場で協働させてもらったことです。

対象地域は浜君の住む能登半島の中核都市の七尾市の中心市街地活性化の事業おこしです。

また平成二十年四月より立命館大学経済学部の観光学の体系化「観光学の役割=地域再生への貢献」の方程式の構築に取り組んでいます、近況としてコンサルと大学の両立は可能かを伝えます。

一週間を十.五日に物理的に伸ばしてやっています、大学(=教育+研究+行政)に七日間、コンサルタントに三.五日=二分の一週間に分けて、睡眠時間で調整しています。一日の時間帯を分けて工夫しています。つらいですが「若さ」の発揮となりいつまで続くのやらと思っていたら友人が二兎を追うな、割り切れと忠告してくれています。

最近の実感をお伝えし参考にして頂きたいと思います。

一つ目は精神年令が若返ったことです。若い学生さんと接していると毎年、年令が若くなる様な感じになります。しかし孫の成長の早いのには負けています。若い人との接触をお勧めします。

二つ目は今までのストックが総合的に活かされ、毎日が輝いていることです。この輝きは元気・勇気を与えてくれます。

三つ目は計画的生活を送らないと宿題が山積してしまうことです、コンサルタント時代を含めて五年ほど前から一週間の総括表と一週間先までの予定表の作成、五週間先の予定表を作成しています、多忙な中で威力を発揮しくれます。

その週間で出来なかったことがはっきりして、つぎの週には大事な課題と認識できるメリットがあります。

四つ目は実践と理論化の合体が進むことです、大学の教育や行政はスタートしていますが、研究はこれからです、研究は今までのお付き合いのある七尾の方々とのストックを活用させて頂いて、世の中に発信して行きたいとおもっています。

浜君はじめ皆様との良い関係を保って行きたいとおもっています。

【プロフィール】
(かないまんぞう)
一九四三年生まれ、まちづくりコンサルタント(株)アルパック取締役会長、二〇〇八年四月より立命館大学経済学部教授、観光学・地域振興・地域再生を目指している

濱のつぶやき　『神様の壷』

ある高僧から伺ったお話。

神様はできないことは何も無い。ただ、それだからこそ叶わない事が一つだけあった。それは「できないという体験」。そこであるとき、たまたま手元にあった壷を地上に落とされた。壷は粉々に砕け散った。そのかけらの一つ一つが、私たち人間であるという。

人には、すべからく個性・人間性というものがある。それは、似ているようで似ていない。これは壷のかけらが似ているようで全く同じものは二つとないのと同じ。

人は、人と出逢うものである。これは、壷だったとき、隣り合わせのかけらだった人を探しているから。時に、極めて親しくなり、しかしやがて疎遠になる人とは、かけらの断面がたまたま似ていただけで、本当の隣のかけら同志ではなかったから。気にする必要も、寂しがる必要も無い。ましてや、無理をして他人に合わせようとするのではなく、無理をせずとも自然に合う人たちとつながれば良い。

反対に、強烈に反発する人々、気に食わない人々が現れることがある。その人たちは壷の反対側だった人たち。彼らもいなければ、元の壷に戻ることは適わない。あちら側はあちら側で正しいと考えていることをやっているだけだから、彼らの存在も否定する必要は無い。

仕事柄、非常に多くの方々と出逢い、議論を交わし、交流を重ねる。今までを振り返って、このお話ほど自らの体験を絶妙に言い当てている説話はない。

できないと思っていたこと、あるいはできないかも知れないことが、できたとき・適ったときの歓び。そして感動は、何にも代え難い。五輪を始めとする多くの競技や、波乱万丈の人生物語に心が動かされるのも、この説話を受け入れれば自ずと納得がいく。

小欄では、物事の捉え方、考え方について考えることが多くなった。自らの仕事は、人々や地域の幸せを現すために、状況を整理し、進むべき方向、すなわち志を立て、実現させるための行動計画を練ることである。ここには理論も重要だが、何を前提とし、どのような視点に立って状況を分析し新しい方向付けをするのかが、最も重要なポイントとなる。

人は、幸せになるために生まれてきていると、最近つくづく感じている。日常の暮らしの中でも、無意識にしている自らの考え方の癖に気づき、その考え方の前提を変えてみたり、視点を変えてみると、見えてくる世界がガラリと変わる。

旧弊を壊す亥年、零リセットの子年を経て、ゆっくりではあるが、新たな歩みを着実に始める丑年を迎えた。多くの出逢いが待っているに違いない。

今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

『見る人によって見るものは変わる』

(株)アスリック プロジェクト推進部　五十嵐 政信

これから書く話は、今から30年ほど前に、某国の某士官学校で学ぶ士官候補生の学生が、教官から聞いた話である。よく読み込まないと、その言わんとすることが伝わらないので、心して読むようにして欲しい。

昔々、ある山深い里に、母親と3人の若い娘が住んでいた。この山深い里には、かれこれ20年近くこの親子以外は誰も住んでいない。父親は一番下の娘が生まれる前に亡くなっている。このため一番年上の娘も、父親の記憶はほとんどなかった。山深い里のため、訪れる人は誰もいない。このため3人の娘たちは、家族以外の人と会ったことがない。だから男という者を見たことがなかったのである。

そんな山深い里に、ある時一人の若い旅人の男がやってきた。そして旅人の男は一夜の宿をこの親子の家に求め、親子はこの若い旅人を受け入れることにした。

親子は、粗末だけど心づくしの食事を食べてもらった後、若者に風呂に入ることを勧めた。若者はありがたく風呂に入ることにした。

体を洗おうと湯船から出た矢先に、一番下の娘が「背中を流します」と言って風呂場に入ってきた。立ち上がった若者に娘が対峙した瞬間、この娘は、「きゃっ」と言って、風呂から駆け出して行った。

娘は姉たちにこう言った。「あの若者には、わたくしたちが持っていない松ぼっくりの様なものを、足の付け根に持っています」

姉たちは信じられなかった。それで真ん中の娘が、「それでは、私が確かめてきます。」と言って風呂場に向かった。そして若者に対して、「お背中を流します」と言って風呂場に入っていった。

若者は驚いた。そしてこの娘の美しさに見とれてしまった。すると娘は、「きゃっ」と言って、風呂場から駆け出して行った。

真ん中の娘は姉妹にこう言った。「あの若者が持っているものは松ぼっくりではありません。それは真っ直ぐ突き出した茄子のようなものです」と。

下の娘と、真ん中の娘は言い争いだした。そこで一番上の姉が言った。「それでは私が確かめてまいります」

姉は、「お背中を流します」と言って風呂場に入っていった。そして姉は若者と対峙した瞬間、「きゃっ」と言って風呂場から駆け出していった。

姉は姉妹の元に駆け戻ってこう言った。「あれは松ぼっくりでも、茄子でもありません。あれは天を向いて突っ立っている松茸のようなものです」と。

教官はここまで話してこう言った。「今の話を聞いて、得たことを述べよ」と。聞いていた士官候補生達は何も答えられなかった。

教官は厳かにこう述べた。「見る人によって見るものは変わる。世の中の全てのことに言えることだ」と。

深い話である。

『 家族 』

合同会社アイアイシー　飯沼　幸生

2008年もそろそろ終わりを告げる頃にこの原稿を書かせていただいています。今年は世界的な不景気もあり、経済的にあまり良いニュースが聞けなかったことは残念です。来年も厳しい状況が続くようですが、なんとか明るいニュースが入ってくることを祈るばかりです。

そんな不安定な経済状況の中で、先日車の中で聴いていたラジオでリスナー（主婦の方）の方からこんなお便りがありました。

『厳しい会社の状況から残業が減り、主人が早く帰宅するようになりました。普段はしない家事の手伝いや、子供と一緒にお風呂に入ったりして、家族で過ごす時間が増えました。子供も大喜びして家の中が明るくなりました。私も美味しい料理を作ろうとすごくやる気がわいてきます。』

すごく温かいお話です。厳しい世の中でも、日本だけではなく世界中でこういった家族がきっといくつもあるんだろうなとしみじみと感じさせられました。

厳しい時代だからこそ、家族の大切さをいつも以上に感じることができる。変な言い方ではありますが、これは不景気の中でのメリットなのかなと。仕事が忙しすぎて、家族サービスができなくなるのはよく聞く話です。歴史にも残るであろう世界的な恐慌にバッタリ出会ってしまったのはもう仕方がない事。仕事一辺倒の生活をしていた方にしてみたら、これは家族を見つめ直す最高のチャンスと言えるでしょう。

自分はなぜ働いているのか？自分の生活のためと答える方もいらっしゃるでしょう。でも大切な誰かのために働けば、いつも以上のパワーが生まれてくるもの。やりがいもできます。幸せな気分になれます。

どんな状況下でも変わらず側にいてくれる家族の存在は、何にも変えられない素晴らしいもの。その存在をいつも大切に思う気持ちが一人でも多く広がれば、もっともっとより良い世界になっていくでしょう。

『富士の国から　～大魔神のたび～ 』

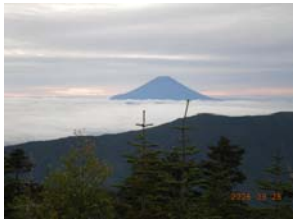
静岡県観光局　溝口　久

南アルプス登山に誘われた。穂高、槍ヶ岳で知られる北アルプスは知れ渡たりアクセスがいいせいか、とてもお客が多いらしい。一方の南アルプスは、アクセスに時間がかかるせいもあって登山客は多くなく、山小屋も快適に過ごせるようだ。少し南アルプスの説明をしよう。静岡・長野・山梨県の県境に連なる大山脈で、赤石山脈と習った記憶がある。富士山の次に高い北岳、赤石岳、荒川三山、聖岳など3000mを越える名峰が13も続く。今回は荒川三山の一つである東岳通称悪沢岳3,141mを目指すというものだ。小生は7月に始めて富士山に登頂して以来、登山熱がふつふつと沸いてきていることもあって二つ返事で行くことにした。

静岡駅からひたすら北上、2時間ほど走りようやく南アルプスの玄関口とも言える井川にたどり着いた。ここにソムリエの資格を持ち、イタリア料理が得意な女将がいる大西屋旅館がある。ここで昼食を食べてみたかった。通常予約無しでは受けないけど、パスタならばと、即興でカルボナーラを作ってくれた。地で採れたマイタケに卵はウコッケイ、ワインも特に厳選したフランスのきりっと冷えた白ワインを出してくれた。大満足、宿屋の建物は相当くたびれていたが、女将の出す料理には新鮮な驚きを感じた。改めて、料理を堪能しに伺いたいものだ。

さて、次は同行の温泉キチの赤池君お薦めの赤石温泉・白樺荘に立ち寄った。泉質は単純硫黄泉ぬるぬるとした質感がたまらない。温泉成分が体内部に沁み込んでくる感じだ。もちろんかけ流し、しかもタダ、宿泊はできないが休憩・食事もできる。もともとは中部電力の工事用の飯場として建設した建物とのこと。でも間もなく取り壊され新しい温泉有料施設に代わるとのこと、湯治の雰囲気があるこの赤石温泉・白樺荘が無くなるのはあまりに惜しいなあ。

イタリアン、温泉ですっかり予定が狂い一時間遅れで畑薙ダムに着いた。ここからは舗装されていない林道が続く、一般車両は進入禁止である。



静岡市は駿河湾から長野、山梨の県境にまで及び、指を立てたようにとがっている部分が南アルプスであり、ここの土地は東海パルプが所有し、ここの関連会社である東海フォレストがここにある山小屋を管理している。二軒小屋に泊まり、翌日悪沢岳を目指すのだが、二軒小屋のある高さ1,000m程からだと登りに8時間、下りに4.5時間ほどかかる。土日の行程では到底無理、林道の管理道路で2,400mまで車で行き、その後に登るという行程をとった。それでも朝4:30起き、登り始めが6:15途中朝食をとって11:00目指す悪沢岳山頂に立った。９月というのに、その標高の高さから霜柱が立ち息は白い、雲海を眼下に見、目の前には群青富士の雄姿があり、南アルプスの峰々を見渡せる。見通しがいいのは幸運だったが、期待の雷鳥を目にすることが無かった。ハイマツの中に隠れていて、敵に発見されないガスっているときによく出てくるとのこと、残念。

案内してくれる東海フォレストの顧問の内海さんが我々に高山植物の名前を次々に教えてくれる。数分後に片っ端から忘れていく。特徴ある名前の「イワインチン」、「トウヤクリンドウ」ぐらいしか思い出せない、あぁぁ。

間もなく山小屋は無人になる。山のシーズンは短い。しかも天候はデリケートだ。高性能ビジネスレインコートで臨みちょいと寒い思いをしたが、何より快晴で見晴らしがよく、ありがたかった。また、登りたいものだ。富士登山に次ぎ、高山の登山にはまりそうだ。